『古代アメリカ』 7, 2004, pp.1-18

＜研究ノート＞

ペルー、ネペーニャ河谷セロ・ブランコ神殿の第一次発掘調査

芝田幸一郎
（日本学術振興会特別研究員／ペルー・カトリカ大学加盟研究員）

【キーワード】
アンデス形成期、海岸地方、編年、チャビン／クピスニケ論議、セロ・ブランコ、ネペーニャ河谷
Andes Centrales, Formativo, Costa, Cronología, Problema Chavín/Cupisnique, Cerro Blanco, Valle de Nepeña

1. はじめに

今日におけるアンデス文明形成期[1)]研究の中心的課題の一つとして、紀元前800年頃を境とする大きな社会変化の解明が挙げられる。それは物質文化スタイルと社会変化、環境と社会変化など、考古学・人類学上の大テーマとリンクする奥行きの深さを秘めており、今後さらなる議論の展開が期待できるものである。筆者は、この課題に取り組むための戦略的な第一歩として、ペルー国アンカシュ県の海岸地方に位置するセロ・ブランコ神殿遺跡の発掘調査に着手した。今回報告する第一次調査は、2002年2月と3月の7週間にわたって実施し[2)]、その後、建築と土器資料の整理・分析を行った。まだ土器分析の統計処理などが残っている段階ではあるが、今後前述の研究課題の解明に大きく貢献できるという見通しが得られている。一方で、2004年度後半に第二次調査を予定しているため、本格的な報告ができるのは数年後になってしまう。そこで、第一次調査で得られた成果の中でも基本的なものを、ひとまず予備報告として発表し、第二次調査のための叩き台としたい。本稿では、まず形成期研究の現状におけるセロ・ブランコ発掘の意義を明示し、その上で、第一次調査の成果のあらましと今後の課題についてまとめることにする。

2. 問題の所在とセロ・ブランコ発掘の意義

2-1. チャビン／クピスニケ論議と編年問題

アンデス文明の形成期を研究する者にとって、ネペーニャは因縁の深い谷である。問題の発端となる論争は半世紀以上昔に遡る。ペルー考古学の父として名高いフーリオ・テーヨは、アンデス文明の起源を探る中で、アンデス山脈東斜面の文化に注目し、いわゆるチャビン中心説[3)]を唱えた。

そして北部山地のチャビン・デ・ワンタル神殿を中心とするチャビン文化の影響を受けた海岸地方の神殿の例として、自ら調査を行ったネペーニャ下流のセロ・ブランコ遺跡をとりあげた[Tello 1943]。同じ頃、逆に北海岸地方を中心とするクピスニケ文化の方がチャビンより古いと考えたラルコ・オイレは、ネペーニャにクピスニケの起源があると予言した[Larco 1941]。

結局テーヨの説を基調として長らく議論が進められた。そして、チャビン・デ・ワンタルから広く中央アンデス各地にチャビン文化が伝わり、物質文化の類似性が生じたとされる時期は、前期ホライズンとして区分されるようになった（表 1）。しかしこのような趨勢は 80 年代に転換期を迎える。チャビン・デ・ワンタルと同時期であると想定されていた大半の遺跡が、各地の遺跡で得られた放射性炭素年代測定値の蓄積などから、実はもっと古いということが判明したのである。これらの遺

Lumbreras 1989	Burger 1992; Pozorski & Pozorski 1987	加藤・関編 1998		海岸地方の代表的遺跡／土器様式
原形成期	先土器時代末期	形成期早期	2500-1800 BC	カラル
形成期前期	草創期	形成期前期	1800-1200 BC	パンパ・デ・ラス・ヤマス
形成期中期		形成期中期	1200-800 BC	ワカ・デ・ロス・レイエス
	前期ホライズン	形成期後期	800-250 BC	サン・ディエゴ
形成期後期	前期中間期	形成期末期	250-50 BC	サリナール（土器様式）

大規模ENSO？

表 1：中央アンデス形成期の編年

※本稿における形成期の各フェイズ名に関しては全て本表を参照のこと。ただしLumbreras 1989の編年用語は用いていない。

跡は、前期ホライズンから草創期に繰り上げられ、むしろチャビン・デ・ワンタルの成立に影響を与えた源流として捉えられるようになっていった[Burger 1981; Donnan ed. 1985]。しかしこうして前期ホライズンの遺跡数が減らされたとはいえ、広範な地域の少なからぬ遺跡が、物質文化の類似性や絶対年代から、依然として前期ホライズンのものとして残されていた。80 年代後半から登場する装いを新たにしたホライズン説は、このような前期ホライズンにおける物質文化の類似性を理解し直すために登場したと筆者は考えている。まずポゾルスキ夫妻[Pozorski and Pozorski 1987]の北部高地民による武力征服説では、カハマルカとカエホン・デ・ワイラスの中間のどこかに起源をもつ人々が、少し南方の山地に位置するチャビン・デ・ワンタルや、カスマ河谷周辺の海岸地方に侵入し、これらの社会を征服して支配下におくことで一つの大政体になったと考える。そしてこれが前期ホライズン（形成期後期）に広範な地域での物質文化の類似性を生んだ原因になる。バーガー[Burger 1992]のチャビン・カルト普及説ないしは「チャビン・ホライズン」説では、別のプロセスが描かれる。草創期（形成期前期・中期）末に何らかの原因で海岸の社会が衰退し、そこへチャビン・デ・ワンタルから発信されたカルト・イデオロギーが浸透する。これは各地のカルトと共存可能であったため、中央アンデスの広い範囲に平和がもたらされる。その中で人々は、共同体を超えたコスモポリタンなアイデンティティーを表現するため、外部グループの土器を模倣した土器を作り始める。こうして前期ホライズン（形成期後期）の中のある時期、チャビン・デ・ワンタル遺跡の編年で言うところのハナバリウ期（400-200 BC）[4)]において、広域に物質文化の類似性が生じることになるの

が、彼の説くチャビン・ホライズンのメカニズムである。

一方で90年代からは、生物学や自然人類学とのコラボレーションを背景にした新しい説が浮上する。まず、海岸地方で形成期後期の放射性炭素年代を有する神殿遺跡がほとんど無いことなどから、形成期後期までに神殿が放棄され、新設もされないという「海岸空白」が指摘される[Onuki 1993]。次いで、魚貝類遺存体などのデータから、形成期後期にエル・ニーニョ現象が発生していたと議論された[cf. Elera 1997]。さらに、北部山地クントゥル・ワシ遺跡における形成期後期初頭の墓から出土した神官の人骨に、海岸の住民特有の病変がみられたことなどから、形成期中期末から後期初頭にクピスニケをはじめとする海岸の社会が、大規模なエル・ニーニョ現象等の自然災害によって打撃を受け、その一部の人々や物質文化が南下したり、山地に移動した可能性が挙げられるようになった[Elera 1997; 加藤・関編 1998; Onuki 2001]。この場合、中期末に始まる人と物の移動の結果、あるいはこのイベントを契機として地域間の広域ネットワークが強まった結果、形成期後期に物質文化の汎地域的類似性が生じるというシナリオになる。筆者は、この「クピスニケ拡散」説が現状では最善のものと考え、これをベースにして自説を展開してきた[芝田 2001]。したがって、積極的にバーガーやポゾルスキの説の是非を問いながら、その上で、海岸空白とクピスニケ拡散の説を確認、ないしは修正してゆくことが、その後展開する自説に説得力を与えるために必要となる。

このような「チャビン／クピスニケ論議」とでも言うべき問題を考える際に浮上してくるのが、海岸地方における編年の問題である。前述した形成期中期から後期にかけての社会変化の諸説を検証するには、変化の前後を含む厚い文化層のある遺跡を発掘し、編年を確立したうえで、他遺跡・地域との関係を考察するのが効率的かつ建設的であろう。ところが現状において形成期中期と後期の遺跡を区別する方法は、放射性炭素年代に大きく依存しており、建築や土器の特徴から峻別する基準が曖昧なまま残されている[5)]。その大きな原因の一つは、海岸地方で形成期の複数のフェイズを持つ遺跡が、全くといっていいほど調査されてこなかったことにある。そもそも、そのような遺跡自体、海岸地方では極めて稀である。そのため広大なペルー海岸地方で、ある地域・遺跡では形成期前期、別の地域・遺跡では形成期中期というように、不連続な形で調査・報告がなされ、それらを総合することが困難な状況にあったのである。紙幅の都合上詳述はしなかったが、前述した近年の諸説は、チャビンを中心として設定するにせよ、クピスニケからチャビンへの影響を重視するにせよ、多様な相互作用のプロセスを前提にした社会変化を描いている。言うまでもなく、かつてのようにどちらが起源でどちらがその影響を受けたなどという素朴な議論では、アンデス形成期の多様な現象は捉えきれないからである。しかし、遺跡間の時間的前後関係すなわち編年の問題は、社会変化のモデルを組み立てる上で、いわば土台に関わり、絶対に軽視してはならない部分でもある。残念ながら、アンデス形成期研究では、今日にいたるまで編年の不備が大きな影を落としている。80年代に旧来のチャビン中心説が崩壊したのも、形成期中期から後期にかけての社会変化をめぐる近年の議論が解決をみないのも、海岸地方の編年が貧弱なまま残されていることに一因があるのは否めない。したがって今日、形成期研究の中心的議論へ効果的に参入するためには、海岸地方の発掘調査等によって、チャビン／クピスニケ論議に関わる編年上の諸問題に新知見をもたらした上で、それに基づいた社会変化のモデルを提示することが望ましい。このように考えるとき、ネペーニャ河谷のセロ・ブランコ神殿の重要性が浮かび上がる。

2-2. セロ・ブランコ発掘の意義

2-2-1. ネペーニャ河谷とセロ・ブランコ遺跡の概要

ネペーニャ河谷はペルー国の首都リマ市からおよそ 340km 北に位置し、その下流部はウィレイの地域区分で言うところの「北部中央海岸（Costa Nor-Central）」に含まれる[Willey 1971]。おそらく上流部がアンデス山脈にあまり深く切り込まないこと、そしてこのあたりの山地への降雨が北隣のサンタ河谷へ流れ込むという地形的条件によって、周辺の河谷と比べてネペーニャではエル・ニーニョ時に洪水が発生しにくいという特徴がみられる[Waylen and Caviedes 1986]。

セロ・ブランコ遺跡はネペーニャ河谷下流部の右岸、海岸線からおよそ 16km 東に位置する。海抜は約 150m、河谷の幅が 6km ほどに広がった平野にあり、一帯はペルー有数の砂糖黍生産地になっている。遺跡は三つの基壇から成り、それらがコの字型に配置されている（図 1）。いわゆる「U 字神殿」である[6)]。U字の開口部は東北東を向いており、遺跡の主軸はネペーニャ川の流れとほぼ平行になっている。表面観察では、中央基壇（写真 1）がおよそ 105×75m、現在の地表からの高さ 14m。テーヨが一部発掘した南基壇は約 85×65m、高さ 4m。最も小さい北基壇は 70×25m、高さ 2mほどである。パンアメリカンハイウェイから分岐して内陸に向かう舗装道路が、中央基壇と南基壇の隙間を通る形で敷設されている[7)]。筆者らの調査以前、セロ・ブランコにおける学術的発掘調査は、テーヨが 1933 年に南基壇の北西隅で実施したものが最初で最後であった[8)]。

2-2-2. セロ・ブランコ遺跡とチャビン／クピスニケ論議

テーヨによるセロ・ブランコ南基壇の発掘に関しては、残念ながら簡単な報告しか残されていない。しかし、今日の形成期研究状況を鑑みて特筆すべき記述を見出すことができる。それら[Tello 1942, 1943]をまとめると、南基壇の層位は以下のようになる（下層から）：

①地山。
②石と泥の建築。ジャガーや猛禽類をモチーフとした粘土製の多彩色レリーフで飾られている。
③洪水によると思われる泥土層（avalancha de lodo）と、その上に載る④の土台層。「チャビン土器」が出土（出土地点が洪水層か建築土台層かは明記されていない）。
④石と円錐形アドベの建築。「チャビン的人物」のレリーフを伴う。
⑤石と再利用円錐形アドベの建築（④のアドベを採掘して利用）。「チャビン的刻線図像」を伴う。
⑥形成期より後の時期。「カスマ文化」に属する。

ここで特に注目すべきは、②のジャガーや猛禽類をモチーフとした多彩色レリーフと、③の「チャビン土器」と洪水層である。これらの年代を確認することによって、チャビン／クピスニケ論議を効果的に再検討することができるからである。

まず、バーガー[Burger 1992]の説において、セロ・ブランコ神殿（南基壇）は、海岸地方におけるチャビン・ホライズン出現の最古の事例として紹介されている。その根拠となっているのは②の多彩色レリーフの様式と、③の「チャビン土器」である[9)]。しかし、テーヨの調査時に放射性炭素年代測定法がなかったこと、現在もなお形成期中期（草創期後半）と前期ホライズン（形成期後期）の遺物、とりわけ土器様式を区別する明確な基準が確立されていないこと、さらにネペーニャ河谷

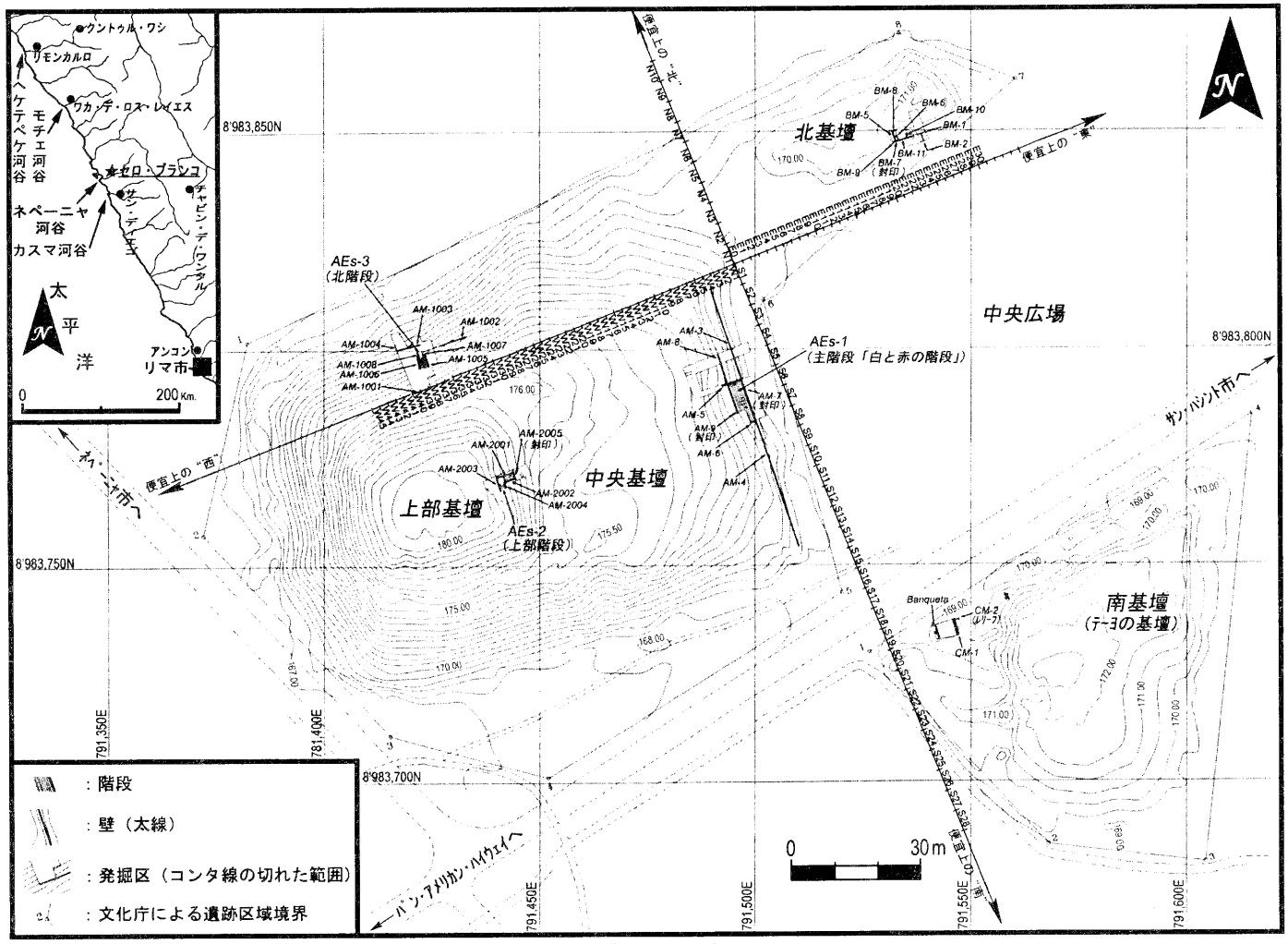


図１：セロ・ブランコ遺跡平面図

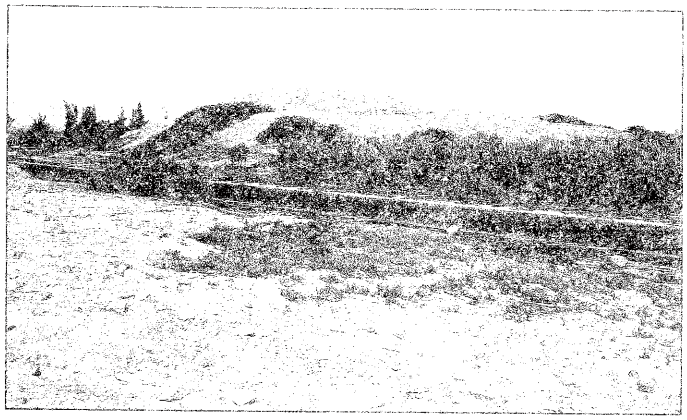


写真１：セロ・ブランコ中央基壇全景
（南基壇上より撮影）

の土器の地域的特徴もわかっていないことを考慮すると、セロ・ブランコを前期ホライズンに位置づける根拠は非常に脆弱であると言わざるを得ない。したがって、もし今後の発掘調査によって②・③の年代がチャビン・デ・ワンタルのチャキナニ期やハナバリウ期よりも古いことになれば、チャビン・ホライズン説に大きな矛盾が生じることになる。

その可能性を物語るのが、③の洪水跡と思われる泥土層である。既に述べたようにネペーニャ河谷では地形的条件などから洪水が起こりにくいのであるが、そこに洪水層がある場合、大規模なエル・ニーニョ現象を想定する必要があるだろう。これを、クピスニケ拡散説で紹介した紀元前 800 年頃、つまり形成期中期末から後期初頭のエル・ニーニョと結びつけるのは難しくない。この仮説が正しいならば、少なくとも洪水層で埋められている②は、チャビン・ホライズンより前に建設されたことになる。

一方で、③の洪水層の後にも形成期と思われる神殿建築の痕跡が認められるため、クピスニケ拡散説の下地となっている「海岸空白」も再検討することになる。さらにエル・ニーニョ現象を挟む形で三つの形成期建築フェイズ（②④⑤）があるため、動植物遺存体の分析によって気候変化の長期プロセスも研究できるだろう。これは、カスマ河谷諸遺跡における動植物遺存体の通時的変化をカスマ先住民と山地からの征服者の食の嗜好の違いに求めた、ポゾルスキの説[Pozorski and Pozorski 1987]を検証することにもつながる。

いずれにせよ、セロ・ブランコが長期にわたって利用された形成期の遺跡であることは間違いない。そのような神殿遺跡は、これまで海岸地方では調査されてこなかった。しかもネペーニャ河谷は、形成期の大神殿が栄えた北海岸から中央海岸までの、ちょうど真ん中に位置する。したがってセロ・ブランコの編年が確立されれば、様々なクロスデイティングの参照軸となる可能性が高く、基礎研究としての意義も大きい。こうして、セロ・ブランコの発掘が今後の形成期研究に大きなインパクトを与えうると判断し、調査実施に踏み切った。

3. 2002年第一次調査、各発掘区の記述

今回の調査では、編年の大枠を把握するため、まず複数の地点で地山まで達することを優先し、建築プランの確認作業は必要最低限に抑えた。本稿で報告するのは、最も重点を置いた中央基壇正面（東面）と北面の発掘の一部だけであるが、他に上部基壇正面（東面）、北基壇南面、南基壇北西隅にも小発掘区を設けた（図1）。上部基壇の発掘では、先述の巨石建築に対応すると思われるL字形プランの深く狭い石造階段（図1：AEs-2）が発見された。北基壇からは、今回の調査で最もバリエーションに富んだ形成期精製土器群が出土した。テーヨ発掘区のすぐ隣を狙った南基壇の試掘では、未報告ないし非合法の大きな発掘跡と遭遇するという予想外の事態により、期待していた成果を上げられぬまま中断を余儀なくされた。これらの詳細については、本稿の焦点である編年問題との関連が薄いため、また紙幅の都合上、別の機会に譲ることにしたい[cf. Shibata and Ugaz 2002]。

以下、各発掘区に関して、下層から上層という順で解説する。

3-1. 中央基壇正面（東面）

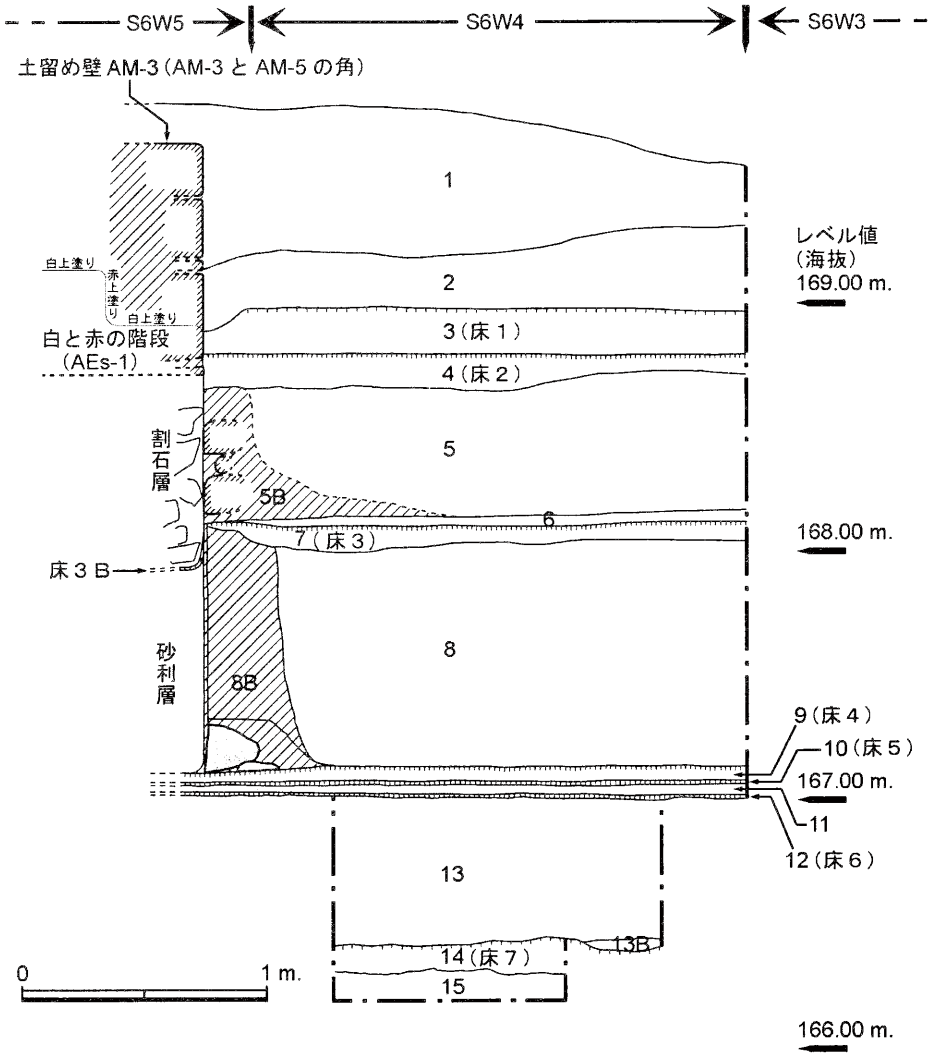
地山	形成期前期（？）の文化層	時期不明の床面	円錐形アドベの構造物	形成期中期（？）の土器を伴う砂利層	石と粘土の構造物	形成期中期（？）の土器を伴う割石層	巨石建築	形成期後期または末期（？）の土器を含む瓦礫層	モチェ中期、中期ホライズンなど
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十

表2：セロ・ブランコ中央基壇の層位略表

最初の活動面（図2：13B, 14）：　地山を覆う堅く締まった層。今のところ建築等は確認されていないが、炉が一基検出された（図2：13B）。炉からは少量の土器片と炭化物（放射性炭素年代測定中）が採取された。

二枚の床面（図2：10, 12）：　張り替えを伴う白床のみで、壁などは見つかっていない。床の張り替えに際しては灰（図2：11）が敷き詰められている。時期決定の助けとなる特徴的な土器は発見されなかった。

円錐形アドベの構造物（図2：7, 8, 8B, 9）：　今回の調査で円錐形アドベが発見されたグリッドはS6W4のみである。断面図から判断すると、低い基壇か低床広場の一部をなすと思われる。下床（図2：床4）の上に横向きに並べられた円錐形アドベを土台とし、その上に堅く締まった粘土の土留め壁（図2：8B）が立てられる。壁の内側は大きな丸い川原石で充填され（図2：8）、この充填材の上に上床（図2：床3）が張られている。土留め壁の表面には、肌理の細かい粘土で上塗りが施され



1：表土。砂糖黍の灰混じり。
2：締まりのない褐色土。
3：床１。土器から見ても形成期より後の時期。
4：床２。AEs-1 と AM-3 に対応。
5：川原石の層。
5Ｂ（土留め壁）：灰褐色粘土と切石から成る。床３Ｂに対応。
6：黄色砂質土。砂利を含む。
7：床３。８Ｂ（土留め壁）と床４に対応。
8：川原石の層。
８Ｂ（土留め壁）：堅い灰色粘土とアドベから成る。上塗りあり。床３と床４に対応。
9：床４。８Ｂ（土留め壁）と床３に対応。
10：床５。
11：灰層。
12：床６。
13：砂利混じりの砂質土。
13Ｂ：焼土。
14：床７？。堅く締まった褐色土。
15：砂利混じりの海砂（地山）。

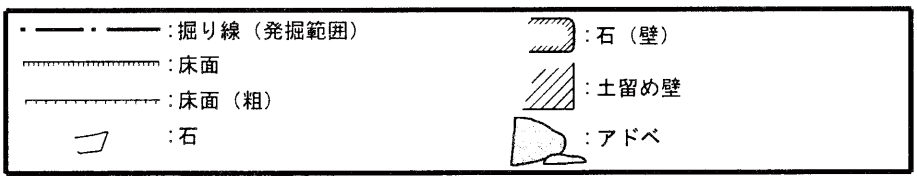


図２：中央基壇正面部トレンチ S6W4 土層断面図（南から）

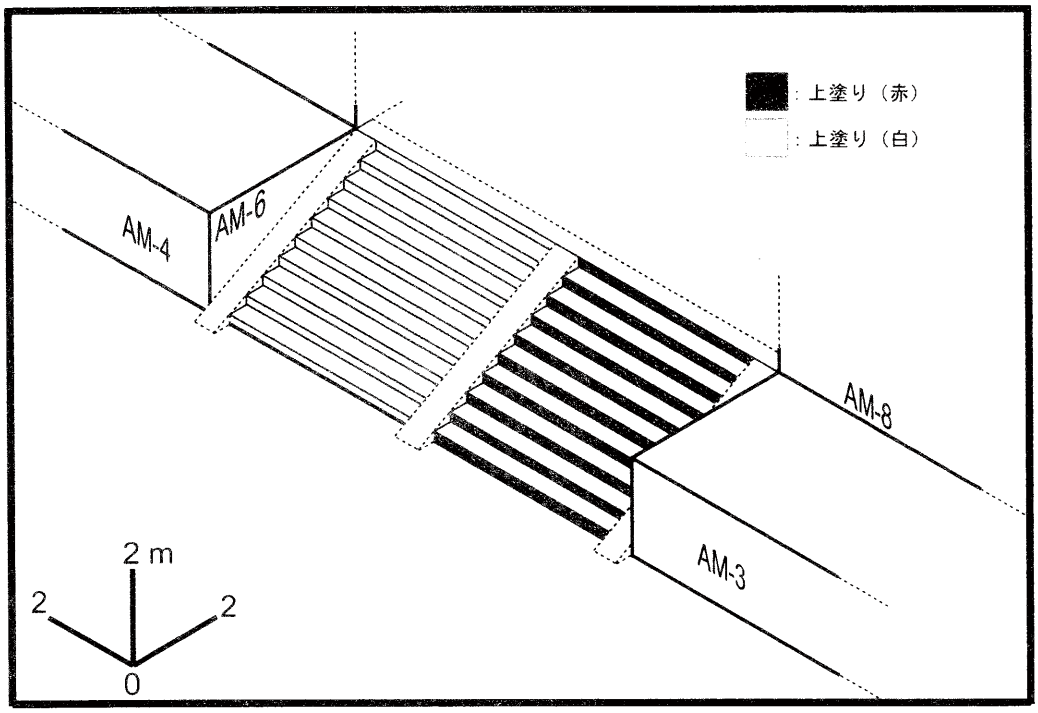


図３：AEs-1「白と赤の階段」復元図

ている。

石と粘土の構造物（図２：5, 5B, 6, 床 3B）：　「円錐形アドベの構造物」の下床はやがて砂利で埋められ、その上に新たな構造物の下床（床 3B）が張られる。また「円錐形アドベの構造物」の上床に細かい砂利を敷いて均した上で、切石と粘土から成る土留め壁（図２：5B）が立てられ、壁の内側は大きな丸い川原石で充填される（図 2：5)。恐らくこの充填材の上には、上床が張られていたと思われるが、現存しない。本構造物も、「円錐形アドベの構造物」と同様に、低い基壇か低床広場の一部をなすと思われる。

巨石建築（図２： 4, AM-3, AEs-1 ）：
「石と粘土の構造物」の下床（図２：床 3B）が粗い割石で埋められ、古い時期の土留め壁（図２：5B, 8B）と平行に、しかし正反対の方向を向いて、新しい建築の正面の土留め壁 AM-3 と AM-4 が築かれる。AM-3 と AM-4 の間には基壇へのメインアクセスを担う階段（AEs-1）が設けられる。一方、「石と粘土の構造物」の上床と土留め壁（図２：5B）上部は、何らかの破壊[10)]を受けて削られた後、新しい建築に対応する下床（図２：床 2）が張られている。

主階段 AEs-1「白と赤の階段」（図 3）：　AM-5 と AM-6 を両側壁とする幅およそ 10m の階段。発見された踏み段の数は 10。各踏み段は、踏み面が約 40cm、蹴上げが約 20cm で、丁寧に面取りされた平らな切石を並べ[11)]、その表面に肌理の細かい粘土の上塗りを施している。上塗りは、階段の中

央を境に南北で色分けされている。南半分の踏み段は全面が白一色である。一方、北半分は、蹴上げが赤色[12)]で、踏み面が白色となる。階段の中央と南北両端には、粘土製の低い仕切壁のようなものがあったようだ。

主階段最上段の西側については、後世の破壊が著しく、また発掘範囲が狭いため、どのようになっていたか今のところ不明である。中央基壇正面は少なくとも二段の土留め壁（AM-3, AM-4, AM-8）によって支えられている。発掘した範囲では、二段目（AM-8）の残りは悪い。しかし基壇の高さを考慮すると、未発見ではあるが三段目の土留め壁まで存在した可能性がある。土留め壁は切石積みで、主階段付近の石はとりわけ精巧に面取り加工されている。大きな切石の長辺は約 1m に達する。

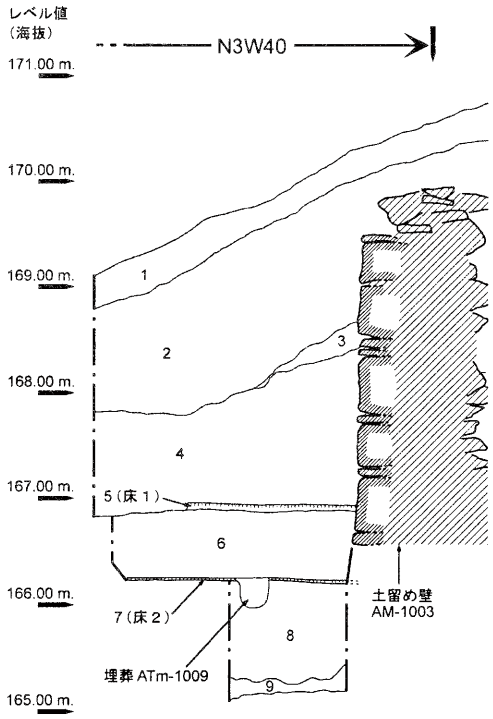
巨石建築の封印（図 1：AM-7, AM-9）：　前述した主階段の最下段と最上段の上には、粗い積み方の石壁（AM-7 と AM-9）が載せられる。基壇の一段目と二段目の土留め壁（AM-3,4 と AM-8）は、それぞれ主階段の最下段と最上段の踏み段と一直線上に並ぶため、AM-7 と AM-9 によってアクセスが完全に封じられる形となる。この封印に対応する床に関しては、土器分析の結果を待つ現状では２通りの可能性がある。「巨石建築」の床（図 2：床 2）が引き続き利用されたか、あるいはその上に貼られた粗雑な作りの床（図 2：床 1）と対応するかである。

巨石建築の再利用：　主階段が封じられた後、中央基壇上面や、土留め壁と土留め壁の隙間（AM-3 と AM-8 の間など）に、多数の墓が設けられる。

3-2. 中央基壇北面

暫定的に三つの時期または建築フェイズに分けられた。なお、図 1 にみられる「北階段」については、今回の調査結果からは層位的位置づけが困難なため、次回の調査課題とし、本稿では触れていないことを断っておく。

巨石建築の建設前（図 4：床 2）：　一枚の白床のみ確認。土留め壁などは見つかっていない。



1：表土。砂糖黍の灰混じり。
2：堅く締まった褐色土。川原石混じる。
3：やや堅く締まった褐色土。
4：川原石、割石、粘土塊の瓦礫層。
5：床 1。AM-1003 と対応。
6：褐色土と川原石の層。
7：床 2。AM-1003 の下を通過。
8：砂混じりの粘質土。
9：砂層（地山）。

図４：中央基壇北面部トレンチ N3W40 土層断面図（西から）

巨石建築（図 4：AM-1003、床 1）：　土留め壁 AM-1003 とこれに対して直角に接続する AM-1004（図 1）、そしてこれらに対応する床面（図 4：床 1）が確認されている。AM-1002 の続きが N2W40 で発見されなかったことなどから、AM-1003 と AM-1002 の関係が不明確であり、AM-1002 が巨石建築の二段目の土留め壁なのか否か、今後の調査で確認しなければならない。なお、前の時期の床面（図 4：床 2）を掘り込んだ形で三つの埋葬（ATm-1009 など）が見つかっているが、これらは AM-1003 に支えられた基壇を築く際に埋設されたものと思われる。いずれの人骨も保存状態が悪く、屈葬で、副葬品は見つかっていない。

巨石建築の再利用：　土留め壁と土留め壁の隙間が、墓地として再利用される。AM-1001 はこの時期の土留め壁であり、当初はやや粗雑な石壁であったが、後に長方形アドベを上に積み重ねて改修されている。

4. セロ・ブランコ遺跡中央基壇出土土器の予備的考察

アンデス形成期研究者の一般的見解として、海岸地方の神殿遺跡では、質量ともに分析に耐える土器資料の収集は困難な場合が多い。このことは、形成期の複数のフェイズの重なりを層位的に確認できる遺跡が見あたらないことと共に、海岸地方における形成期編年の確立を難しくしてきた。

今回のセロ・ブランコ遺跡発掘調査では、海岸地方では先例を見ないほどバリエーションに富み、かつ少なからぬ量の形成期土器が採集された。さらに、形成期の中の複数のフェイズが、建築の更新という明確な形で区切られており、各フェイズに対応する土器群の特徴も把握されつつある。ならば、今後の継続調査だいでは、セロ・ブランコの編年を骨組みとし、これまで海岸各地で報告されていた編年に関する資料を総合することも難しくない。

まだ土器分析が終わっていないため、以下の考察では、全出土土器の中から特徴的なものに絞って、暫定的な形で提示することになる。土器の名称は、タイプ名ではなく、装飾など他の遺跡との比較が容易な特徴を表した仮称とする。また、建築と土器の対応関係について確定できていない場合は、出土コンテクストを簡単に併記する。以下、下層から上層へという順序で記述する。

中央基壇における最古の土器群

中央基壇正面の発掘によって地山直上の文化層（表 2：二）から出土した土器は、器形が判るものでは無頸壺が最も多い。その口縁部は平たくされており、胎土には砂が多く混ざっている。これらの特徴と、粗い刺突文の装飾は、カスマ河谷における形成期前期の土器[Pozorski and Pozorski 1987, 1998]と共通するものである。炉に伴う形で土器片と炭化物が得られており、年代測定の結果が待たれる。

赤地黒鉛塗布土器を中心とする土器群

現在目にすることができる中央基壇（巨石建築）の下には、「円錐形アドベの構造物（表 2：四）」と、「石と粘土の構造物（表 2：六）」が埋もれていた。中央基壇正面の発掘によって、上記構造物の更新時に凹部を充填した覆土（表 2：五, 七）から、他の形成期諸遺跡とクロスデイティング可能

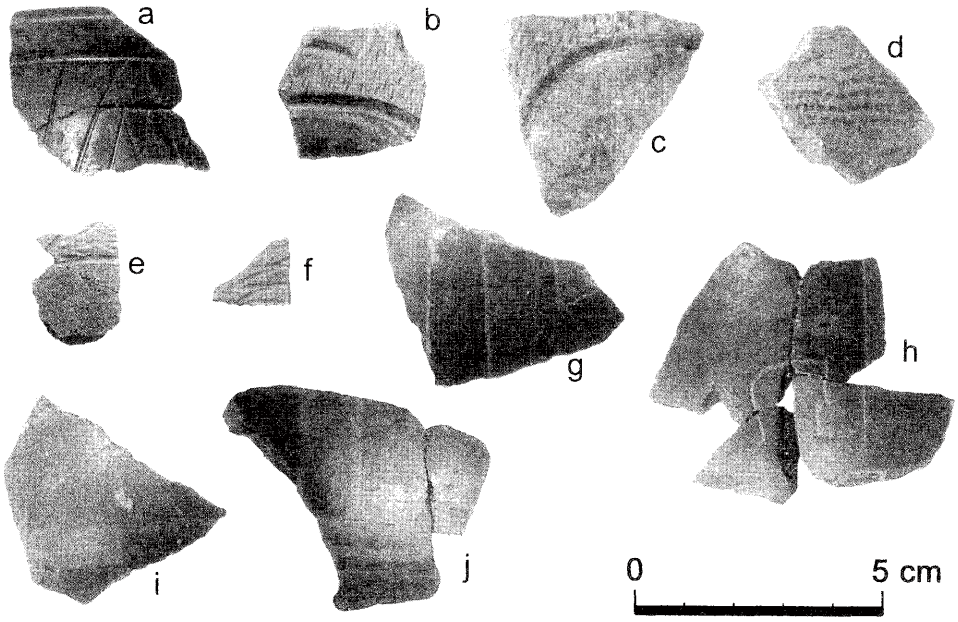


写真２：中央基壇正面部トレンチ S6-7W7 出土土器
（図３－床３Ｂ上の割石層に対応）

な資料が出土している[13)]。最も多く出土したのは、赤地黒鉛塗布土器（写真 2：g-j）で、同様の土器は形成期中期に属する北部山地クントゥル・ワシのイドロ期層[井口 2002]や、北海岸における形成期中期の代表的な遺跡であるモチェ河谷のワカ・デ・ロス・レイエス[Pozorski 1983]などから発掘されている。またラルコ・オイレ博物館にも多数所蔵されており、そのほとんどが北海岸出土とされている[14)]。その他に特徴的なものとしては、アンコンなど中央海岸の形成期諸遺跡との関係を示唆する装飾土器も見受けられる（写真 2：b, c)。以上の土器の内、赤地黒鉛塗布土器は表 2 の五・七両方から多数出土しているため、少なくとも「石と粘土の構造物」との共伴関係は間違いないだろう。一方、表 2 の七は、巨石建築の建立時に盛られた層と考えられるため、ここから出土した土器群（写真 2）の一部は、巨石建築を造った人々が製作・投棄した可能性も捨てきれない。しかし基本的には、「円錐形アドベの構造物」と「石と粘土の構造物」におけるプランの類似性、そして各々の構造物を埋める層（表 2：五, 七）から出土した土器複合がほとんど一致することから、表 2-五の土器が「円錐形アドベの構造物」に共伴し、表 2-七の土器（写真 2）が「石と粘土の構造物」に共伴するものと筆者は予想している。

さて、後述するように、この土器群の対応年代が、チャビン／クピスニケ論議におけるセロ・ブランコの重要性と密接に関わってくるので、時期決定には慎重を期したい。しかし他の遺跡の土器とのクロスデイティング、そしてセロ・ブランコにおける層位から判断すれば、形成期中期の可能性が最も高いと思われる。いずれにせよ今後の土器分析統計作業の結果と、放射性炭素年代測定、そして第二次調査で床上直上など良好なコンテクストからの採取が待たれる。

巨石建築に伴う、あるいはその放棄後の土器群

以下の土器についての記述は、中央基壇北面から出土したものになる。まず、巨石建築の床土およびその下の層（図4：5, 6）から出土した土器群には、前述した土器群の特徴がみられなかった。一方、下記の巨石建築を埋める最初の層と類似する無文土器は含まれるものの、装飾土器についてはサンプル数が少なく、いまのところ時期決定の基準にはできない。

巨石建築を埋める最初の層（図4：4）から出土した土器群（写真3）は、アンデス形成期の土器の一般的特徴を持ちながらも、赤地黒鉛塗布土器を中心とする土器群とははっきり一線を画している。最も多く出土した特徴的な土器は、網目または織物圧痕文様土器（写真3：b, c）とパンパイプ（写真3:h）であり、これらはカスマ河谷の大型集落遺跡サン・ディエゴからも出土していた[Pozorski and Pozorski 1987]。サン・ディエゴの放射性炭素年代は、形成期後期後半を指し示している。しかしながらセロ・ブランコ中央基壇では、ネペーニャ河谷中流域の一般調査[Proulx 1985]以外では全く知られていない土器（写真3：a）や、セロ・ブランコ以外での出土報告が見あたらない土器（写

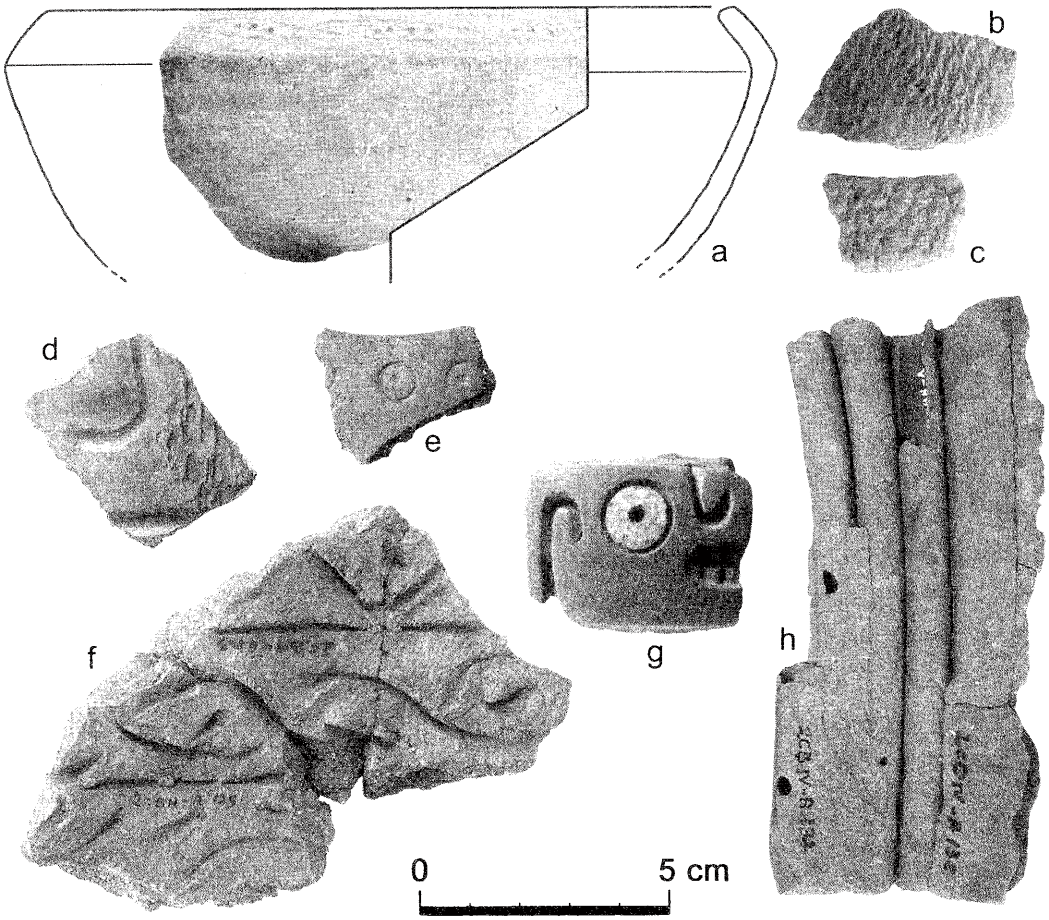


写真３：中央基壇北面部トレンチ N3W40 第４層出土土器

真3：f, g）も目立つ[15)]。また、床面直上など良好なコンテクストからの出土ではないこともあり、これらの土器が巨石建築の活動時に製作されていたものか、建築放棄後の時期に製作されていたものか、その判別には少なくとも土器分析の統計作業の結果を待たねばならない。以上の理由から、現時点ではセロ・ブランコ中央基壇の巨石建築フェイズが形成期のどのフェイズに対応するかについて断定を避けざるを得ない。とはいえ、巨石建築の床直下でも床上でも、少なくとも形成期前期・中期の典型的な土器が発見されなかったことは、特筆に値する。なお、床上の層からは、バーガーがチャビンの影響として例示することの多い圏点文土器も1点出土している（写真3：e）。

巨石建築の形成期編年上の位置づけを明らかにすること、そしてこれに伴う土器のタイポロジーを確立することは、後述するチャビン／クピスニケ論議との関係からいっても、第二次調査における最重要課題の一つである。

巨石建築の再利用に伴う土器群

巨石建築の階段が封じられた後、土留め壁と土留め壁の間の狭いテラス状空間などが、墓地として再利用されている。副葬品の土器は、粗い圏点文を多用する典型的なカスマ文化の特徴を有するものが最も多く、ついでランバイェケやチムー的なものも見受けられる。また、攪乱層などからではあるが、モチェ中期の土器片も少なからず出土している。したがって、形成期の神殿が放棄された後、かなり長い期間にわたって墓地などとして利用されていたことが推測される[16)]。

5. チャビン／クピスニケ論議に関する予備的考察と第二次調査への課題

今回の調査では、大規模な非合法ないし未報告発掘に先を越された形となり、南基壇北西隅の発掘ができなかった。南基壇の本格的発掘ならびに中央基壇の成果との総合は、第二次調査での重要な課題となる。しかしその前に、現時点で利用できるテーヨの資料と今回の成果を予備的に縫合し、そこから見えてくる要点を指摘しておきたい。

中央基壇の層位（表2）と南基壇の層位（2-2-2の①～⑥）を一つにまとめるのは難しいが、幾つかの参照点を利用すると、両者を関係づける方法が二通り考えられる。第一の方法では、円錐形アドベ（表2の四と2-2-2の④）を参照点とする。この場合、南基壇の多彩色レリーフが形成期前期に遡る可能性も出るため、あまり現実的ではない。第二の方法では、建築材料と土器を参照点とする。表2の六・七を、2-2-2の②・③と対応させてみるのである。この場合、「石と粘土の構造物」の上床と土留め壁の一部が破壊されていることは、エル・ニーニョ現象と結びつけられるかもしれない。そして、先述した赤地黒鉛塗布土器を中心とする土器群が形成期中期であるという推測が裏付けられれば、多彩色レリーフは形成期前期ないし中期となるだろう。いずれの場合にせよ、二つの基壇の層位は部分的にしか重ならないし、重ね方は推測の域を出ないものであるが、少なくとも、バーガーがチャビンの影響と考えている多彩色レリーフを、形成期後期に比定する積極的なデータがみつかっていないことは確かである。一方で、テーヨの発掘では多彩色レリーフの神殿が埋まった後にも、「チャビン的」図像を伴う建築（2-2-2の④・⑤）が見つかっているため、これらも視野に入れてバーガーの説を検証することが、第二次調査では必要になってくるだろう。

今回の中央基壇の発掘では、明らかな洪水跡を確認することはできなかった。果たして発掘地点

の設定に問題があったのだろうか。今後、まずは大量に採取した魚貝類遺物の分析を依託し、当時のエル・ニーニョ現象について検証を進める予定である。この作業は、2-2-2 で述べたようにポゾルスキ夫妻の仮説を検証するためにも有効である。また第二次発掘調査で、南基壇の南西部にある手つかずの地区を発掘し、テーヨの言う洪水層それ自体を確認する必要もあるだろう。

一方で、中央基壇の巨石建築の存在が形成期後期ないし末期かもしれないという可能性は、予想外の問題も投げかけている。現在までのところ海岸地方では、形成期後期・末期ともに大型集落遺跡や小規模神殿遺跡の報告はあるものの、このような石造大神殿の存在は全く確認されていないからである。クピスニケ拡散説とセットになっている形成期後期の「海岸空白」について、あるいは形成期末期における神殿を離れた新しい社会のあり方の萌芽出現という研究者間のコンセンサスについて、その妥当性の再検討、あるいは少なくとも地域的な修正、を念頭に置きながら、第二次調査を通じて巨石建築の年代決定を慎重に進めたい。場合によっては、従来のチャビン／クピスニケ論議を離れる形で、新たなモデルを模索する必要が生じるかもしれない。これらは今後ネペーニャ河谷の調査を続ける上での大きな課題である。

【謝辞にかえて】

上部小基壇の階段部分の発掘を担当した Katherina Ríos Luna（カトリカ大学考古学専攻）が、2003 年４月 19 日、プーノからモケグアへ向かう夜行バスの事故で亡くなった。23 歳であった。優れた成績から大学では Jefe de práctica に任命され、豊富な発掘経験を有し、加えて英・独語にも堪能で、将来を嘱望された才女であった。文字通り明朗活発で友人が多く、加えて眉目秀麗。筆者の悪友がアタックし、轟沈したのはまだ今年のことではないか。酷暑のセロ・ブランコで苦楽を共にした仲間として、調査成果についての最初の専門誌発表であるこの場を借り、あらためて畏友 Kathy の冥福を祈りたい。

註

1) およそ 2500-50 BC。従来、形成期の始まりは 1800 BC 頃とされ、土器の出現がその指標とされてきたが、本稿ではアンデス文明の初期形成過程において神殿が果たした社会的・文化的役割を重視する立場をとり、神殿の登場をもって形成期の始まりとする新しい編年[加藤・関編 1998]を採用する。

2) 本調査は、2000 年度平和中島財団日本人留学生奨学金（調査資金として申請）の交付を受けて、ペルー文化庁の許可（C/007-2002）のもとで実施された。筆者を除く主な現地調査メンバーは以下の通り：Juan Ugaz（Co-Director、現在シパン王墓博物館研究員）、Hugo Ikehara、Katherina Ríos、María Tord（以上 3 名助手、カトリカ大学考古学専攻）、Carlos del Mar（遺跡保存修復、文化庁ラ・リベルタ支局）。

3) チャビン・デ・ワンタルやコトシュ遺跡が位置するアンデス山脈東斜面のいずこかに起源を発するチャビン文化がアンデス文明の母胎であり、チャビン・デ・ワンタルを通じて中央アンデス全域に拡がったという説[Tello 1960]。

4) バーガーによるチャビン・デ・ワンタル遺跡の居住区の発掘で、ハナバリウ期のコンテクストからは放射性炭素年代が得られていない。400-200 BC という年代は、層位的にハナバリウ期のコ

ンテクストに前後する二つのフェイズ（試料2点の年代が出ているチャキナニ期と1点の年代が出ているワラス期）の隙間を埋める形で推定されたものである[Burger 1992: 165]。

5) 建築に関しては神殿が造られなくなり大集落が新設されること、土器に関しては鐙型ボトルの口縁部肥厚などが、海岸部における形成期後期の特徴として認識されはじめている[cf. Elera 1997]。しかし鐙型ボトルという特殊な土器の口縁破片が必ずしも出土するとは限らないという問題に加え、発掘調査によるコンテクストのはっきりしたサンプル数が少ないため、地域的特徴と時期的特徴を混同する危険性もある。

6) セロ・ブランコがU字神殿であるという見解を公表したのは、筆者の知る限りビショフが最初である[Bischof 1997]。テーヨは中央基壇と南基壇の関係について言及しておらず、その後ネペーニャで調査を行った研究者らは、中央基壇と南基壇を別々の遺跡としたり[Proulx 1968]、一つの遺跡と考えてもU字形プランへの言及はしていない[Daggett 1984, 1987; Proulx 1985]。

7) もともとは海岸と内陸を結ぶ鉄道が走っていた。余談だが、1925年に洪水で破壊された線路の補修工事の際、セロ・ブランコ中央基壇と南基壇を結ぶと思われる地下通路が発見されたという当時の新聞記事があり興味深い[Daggett 1987]。

8) テーヨの発掘以後にセロ・ブランコ遺跡を扱った主な研究で、何らかの形でフィールドワークを含むものとしては、プルールスによるネペーニャ河谷下流～中流中心の遺跡分布調査[Proulx 1968, 1985]、ダジェットによるネペーニャ河谷中流中心の遺跡分布調査[Daggett 1984]とテーヨの時代のセロ・ブランコ発掘調査関係資料再検討[Daggett 1987]、ビショフによる南基壇の図像・建築研究[Bischof 1997]、ベガ＝センテーノによる南基壇の図像・建築研究[Vega-Centeno 2000]が挙げられる。

9) バーガーは、この土器がチャビン・デ・ワンタルの土器編年におけるチャキナニ期とハナバリウ期のどちらに相当するのか明記していないが、「前期ホライズンの始まり頃」と言う記述[Burger 1992: 199-200]からみると、ハナバリウ期というよりむしろチャキナニ期対応を想定している可能性がある。

10) この破壊が自然現象によるものか人為的なものかは、今のところ不明である。

11) ほとんどの場合、平石と平石の間に楔状の小さな割石が挟まれる。

12) 正確には、やや朱色がかったピンク色。

13) S6W4では、共伴する特徴的な土器が見つからなかった。しかし、白と赤の階段（AEs-1）の西側に設けたトレンチS6-7W7では、明確に対応する層から、一連の装飾土器群が出土した。

14) 2003年よりラルコ博物館のインターネット・デジタルアーカイブで閲覧可能（http://catalogomuseolarco.perucultural.org.pe/）。

15) 写真2gに関しては、形成期より後の時期の可能性も考慮する必要があるだろう。

16) 埋葬はかなり密集しており、これを狙ってあけられた無数の盗掘抗とあいまって、形成期の遺構の調査を非常に難しくしている。ただし階段部分と中央広場では、発掘した範囲において、この時期の埋葬が全く見られなかった。

引用文献

Bischof, Henning

1997 Cerro Blanco, valle de Nepeña, Perú - un sitio del Horizonte Temprano en emergencia. In *Archaeologica Peruana 2*, edited by E. Bonnier and H. Bischof, pp.120-144. Sociedad Arqueológica Peruano-Alemana. Reiss-Museum, Mannheim.

Burger, Richard

1981 The Radiocarbon Evidence for the Temporal Priority of Chavín de Huántar. *American Antiquity* 46: 592-602.

1992 *Chavín and the Origins of Andean Civilization*. Thames and Hudson, London.

Daggett, Richard

1984 *The Early Holizon Occupation of the Nepeña Valley, North Central Coast of Peru*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst. University Microfilms, Ann Arbor.

1987 Reconstructing the Evidence for Cerro Blanco and Punkurí. *Andean Past* 1: 111-132.

Donnan, Christopher ed.

1985 *Early Ceremonial Architecture in the Andes*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

Elera, Carlos G.

1997 Cupisnique y Salinar: alugunas reflexiones preliminares. In *Archaeologica Peruana 2*, edited by E. Bonnier and H. Bischof, pp.120-144. Sociedad Arqueológica Peruano-Alemana. Reiss-Museum, Mannheim.

井口欣也

2002 「クントゥル・ワシの土器タイポロジー」『平成 11～13 年度科学研究費補助金〔基盤研究(A)(2)〕研究成果報告書：アンデス先史の人類学的研究ークントゥル・ワシ遺跡の発掘』pp.25-44.

加藤泰建・関雄二編

1998 『文明の想像力ー古代アンデスの神殿と社会』角川書店.

Larco, Rafael

1941 *Los Cupisniques*. Casa Editorial La Crónica y Variedades, Lima.

Lumbreras, Luis

1989 *Chavín de Huántar en el nacimiento de la Civilización Andina*. Instituto Andino de Estudios Arqueológicos, Lima.

Onuki, Yoshio

1993 Las actividades ceremoniales tempranas en la cuenca del Alto Huallaga y algunos problemas generales. In *El Mundo Ceremonial Andino (Senri Ethnological Studies 37)*, edited by L. Millones and Y. Onuki, pp.69-96. National Museum of Ethnology, Osaka.

2001 Una perspectiva del Período Formativo en la sierra norte del Perú. In *Historia de la Cultura Peruana: Tomo I*, pp.103-126, Fondo Editorial del Congreso del Perú, Lima.

Pozorski, Thomas

1983 The Caballo Muerto complexes and its place in the Andean chronological sequence. *Annals of the Carnegie Museum of Natural History* 52: 1-40.

Pozorski, Shelia and Thomas Pozorski

1987 *Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru*. University of Iowa Press, Iowa City.

1998 La dinámica del valle de Casma durante el Período Inicial. *Boletín de Arqueología PUCP* 2: 83-100.

Proulx, Donald

1968 *An Archaeological Survey of the Nepeña Valley, Peru*. Research Report No.2, Department of Anthropology, University of Massachusetts, Amherst.

1985 *An Analysis of the Early Cultural Sequence in the Nepeña Valley, Peru*. Research Report No.25, Department of Anthropology, University of Massachusetts, Amherst.

芝田幸一郎

2001 「競合する政体、移ろう発展の軌道ーアンデス形成期における社会発展のモデル」『古代アメリカ』4: 1-28.

Shíbata, Koíchiro and Juan Ugaz

2002 *Informe preliminar del proyecto de investigación arqueológica Cerro Blanco de Nepeña – primera temporada 2002*. Informe preliminar presentado al Instituto Nacional de Cultura, Perú.

Tello, Julio C.

1942 Origen y desarrollo de las civilizaciones prehistóricas andinas. *Actas y Memorias del XXVII Congreso Internacional de Americanistas*, vol. 1, pp. 589-723. Lima.

1943 Discovery of the Chavín Culture in Peru. *American Anthropologist* 9(1):135-160.

1960 *Chavín: Cultura Matriz de la Civilización Andina*. Publicación Antoropológica del Archibo "Julio C. Tello" vol.2. Universidad Nacional Mayor de San Marcos, Lima.

Vega-Centeno, Rafael

2000 Imagen y simbolismo en la arquitectura de Cerro Blanco, Costa Nor-Central Peruana. *Boletín de Instituto Francés de Estudios Andinos* 29(2): 139-159.

Waylen, P. and C. Caviedes

1986 El Niño and Annual Floods on the North Peruvian Littoral. *Journal of Hydrology* 89: 141-156.

Willey, Gordon

1971 *An Introduction to American Archaeology Vol. II: South America*. Prentice Hall,, New Jersey.

原稿受領日　2003 年 12 月 02 日
採択決定日　2004 年 02 月 07 日